

## 保護者と共に（感動の共有） 港区立港南幼稚園（東京都港区）

【5歳児】

都会の中であって自然はたくさん見付けられる。しかし、見出す目がなければ、意味をもたないを考える。本園の小さな園庭にある無限の可能性に保育者も保護者も目を向けていくことが必要であると感じ、実践を重ねてきた。

### 事例1 カエルになって遊ぶ～親子で表現を楽しむ

4歳の3月より、園庭のピオトープにカエルの卵を見付けた。喜んだり戸惑ったりしながら卵の変化を楽しんでいたが、ある日干からびてしまうという経験をし、その後卵を再び見付けてからは、かかわりが深まっていった。こうしたオタマジャクシやカエルとの出会いから、自分たちもカエルになり遊ぶ姿が見られた。特に、絵本「10ぴきのかえる」（作：間所 ひさこ、絵：仲川 道子、出版社 PHP 研究所、価格 ¥1,173）は、シリーズでいろいろな話を楽しんだ。そして、自分たちでカエルの絵を描いたお面や様々な遊具を使って場を作り、「ぎろろん山は、ここから登ろう!」「ひょうたん沼で泳ごう!」など、絵本に出てくるストーリーでごっこ遊びを楽しんでいった。その後、運動会では、親しんだり楽しんだりしたカエルのイメージを踊りにして取り組んだ。

いろいろなカエルを描き表したカエルのお面を親子で被り、カエルのいろいろな動きを取り入れたリズム『ケロケロロック』の踊りを全身で楽しんだ。そして、広い場で、カエルの気分になって親子で伸び伸びと動くことができた。

**キーワード：**自分を表現する、感動の共有



親子でカエルに変身

### 事例2 「庭の植物にネームプレートをつけよう」～知ることを手がかりに

園生活を体験した5歳児の親子で、園庭の樹木、植物にネームプレートをつける活動をした。「名前は聞いたことがあるけれど、どれなんだろう...」「こんな名前聞いたことがないなあ」など、親子で本を調べたり、園庭を回りながら推測をしたりしてゲーム感覚で楽しみながら、プレートをつけた。

プレートには、実のなる物、特徴的な匂いのする物、卵が生み付けられる物など、継続的に見ていくことが楽しめるように印を付けた。5月末、ユスラウメに実が付くと、「ちゃんの木に実がなってるよ」とプレートをつけた幼児に知らせる姿が見られた。樹木に愛着をもち、気付きのきっかけになったと思われる。

その後、プレートは、園庭で見付けた虫の名前を調べる時の手掛かりになったり、幼虫を探す手掛かりになったりして活用されている。遊び込んでいくにつれ、子どもたちと作成した園庭の“しぜんたんけんちず”が、頭の中でも描かれるようになったと思われる。

**キーワード：**直接かかわる、発見、好奇心



### 事例3 「ピオトープをきれいにしよう」～自主的に掃除する保護者

天気の良い日が続き、ピオトープに藻が大量発生した。すると降園後の園庭開放の時間、数名の保護者から「ピオトープを掃除しても良いでしょうか」と申し出があり、保育者も一緒に掃除をした。保護者が「何かないかなあ。ピオトープにもっといろんな生き物がいると良いですよ」と探したり、「あっ、ヤゴ! ヤゴは水に戻した方がいいですよね」と話したりしながら楽しんで行うことができた。

幼稚園での生活を通して、幼児だけでなく保護者も自然に興味や関心をもつようになった。また、自然にかかわる幼児たちの姿を知り、園の環境に自分たちもかかわり、一緒により良いものを作っていこうとする思いが伺えた。

掃除をしている時、池の中にメダカがいることを発見した。容器に入れると、周囲の幼児たちが次々と集まり、「えっ、メダカいたんだ!」と嬉しそうに眺める姿もあった。次の日、再びピオトープを覗きに行くがなかなかメダカを見付けられず、考えた末「メダカ釣り」や「メダカすくい」を始めた。このことがきっかけとなり幼児たちはピオトープを継続的に見に行き、新しい発見を楽しむようになった。また、いろいろな水の中の生き物を知り、興味や関心をもって、かかわるようになった。

9月の台風の後、5歳児が雨と風が吹き荒れた園庭を見ながら、落ち葉で覆われてしまったピオトープを見付けた。すると、「池を綺麗にしなくっちゃ」「ヤゴがかわいそう」と網を使って葉を取り除き、葉に掛かった小さなヤゴをピオトープに戻していった。自分たちのピオトープを大切にしていこうとする気持ちが確かに育っていることや、生活の一部としてピオトープの存在があることを知った。



「僕たちもきれいにしよう。」

**キーワード**：直接かかわる、発見、自分を表現する、思いやる気持ち、生命の大事さに気付く、感動する心、感動の共有

<考察>

幼児たちは生命ある生き物とのかかわりで心が揺さぶられ、いろいろなことを思い、考えた。自分以外の他者に思いを寄せる経験をし、それらがいろいろな形で表現され、幼児の「科学する心」の育ちにつながった。共に生活し日々を重ねていく者として、幼児・保育者・保護者が経験したことを一緒に喜び、楽しみ、共感し合うかかわりの中で、幼児の心がより豊かになる。幼児の目線で大人たちも自然を見付け、自然に対する不思議さや美しさに心が動き、思いや感動を共有することで「科学する心」が芽生えてくると感じた。また、考えたことを試行錯誤しながら確かめていく過程や発見の喜びが「科学する心」を育てていくと考える。

### みどころ

日常の園生活で、同年齢の子どもたちと保育者が充実した生活を展開している環境は、保護者にとっても魅力的です。保護者の方も子どもたちと一緒に生き生きと活動することはもちろん、子どもたちの成長を支える環境の重要性を実感することで、更に園の環境に興味をもって、進んでかかわることに結び付いています。

またこの事例から、子どもとの活動や環境へかかわることによって、保護者自身が感動したり子どもと思いを共感したりすることが、子どもたちの「科学する心」の育ちに深くかかわっていることが読み取れます。